会報

No. 113

令和７（2025）年９月15日

https://www.library.pref.kyoto.jp/k-lib/council

京都府図書館等連絡協議会

事務局
京都市左京区岡崎成勝寺町
京都府立図書館内
TEL（075）762-4655

＜目次＞

１面
・亀岡市立図書館中央館リニューアルオープン一年を迎えて（亀岡市立図書館中央館）

２面～3面
・京丹波町図書館開館二年を振り返って（京丹波町図書館）
・歴彩館春季企画展「EXPO1851→2025」を開催して（京都府立京都学・歴彩館）

４面
・議会事務局職員へのレファレンス研修実施報告（京都府立図書館）

亀岡市立図書館中央館 リニューアルオープン 一年を迎えて

亀岡市立図書館中央館　山本　美幸

令和六年五月一日、令和五年度より工事に入っていた亀岡市立図書館中央館がリニューアルオープンしました。

中央館は、昭和五十五年に亀岡市制施行二十五周年記念事業として建設され、本年で建築四十五年を迎えました。

建築後三十三年目を迎える平成二十五年には大規模な耐震補強改修を行い、その後、令和五年のリニューアル工事により現在の姿となり、令和六年五月一日の開館に至ったところです。

昭和五十五年の開館当初は三万冊の蔵書数でスタートした中央館ですが、このリニューアルオープン後の現在では、蔵書数が十三万冊を超えており、当初の四倍以上の蔵書数となっているところです。

▶写真①

リニューアルを行う前の中央館については、やはり昭和の図書館ということもあり、多くの方がイメージする背の高い書架、狭い通路といった図書館のステレオタイプをイメージさせる蔵書の貸出を中心とした館内レイアウトとなっており、閲覧席の数などは心もとなく、館内でゆったりと過ごしていただくことも、のんびりと読書にふけるのも難しい施設でした。

昭和の図書館のままではいずれ利用者が離れていき、図書館の目的が果たせなくなるという恐れもある中、令和四年に亀岡市が行った「子どもファースト宣言」の中でうたわれる施策である「子どもに優しいまち」を形にするため、中央館をリニューアルし読書に親しむ環境づくりが行われることとなりました。

リニューアル前の中央館では、トイレなどの水回りも旧式化が目立ち、設備的にも魅力が薄く、市民からは「自習もできない、本もゆっくり読める場所もない。」というご意見を頂戴していたことから、リニューアルに際してはワークショップなどの機会を作り、利用者などからのご意見を広く取り入れ施設設計を行いました。

リニューアル後の現在の中央館については、これまでの図書の貸出、返却や閲覧といった基本的な機能はそのままに、更にゆっくり快適に滞在いただき、一日を過ごしても飽きられない施設とすることを目指し、落ち着きを演出できる木材フローリング敷の床や国産杉材を利用した書架を配し、閲覧席を大幅に増やしました。（写真①）

また、自由にお使いいただける屋外テラスを三階に設置したり、（写真②）自習やオンラインワークもできるフロアや公衆Ｗｉ－Ｆｉも新たに設けました。そして一部限定ではあるものの、多くの図書館では禁止される飲食もできる席や給水スポットなども新たに設営しました。併せて、トイレにつきましても、大幅に改修し、現在主流の使いやすく明るさを感じられる、白を基調とした乾式の洋式トイレに改装しています。

このような滞在型図書館といった形へ舵を切り、早くも一年が経過しました。

以前と比較して感じることは、貸出などの利用人数は大きな変化が見られないにも関わらず、館内のいたるところで常に人の気配を感じます。

これは、貸し借りだけに往来する利用者に加えて、蔵書本の貸し借りに関わらず長時間滞在しゆっくりしていく利用者が増えたためだと感じています。

また、一日を過ごせる場所になったとのご意見を頂戴することも増えており、図書の貸し借りだけではなく、快適に一日を過ごせる一つの居場所として市民に認識されつつあるのではないかと喜んでいるところです。

▶写真②

京丹波町図書館 開館二年を振り返って

京丹波町図書館　藤山　明子

令和五年四月に京丹波町図書館条例が施行され、二年が経過しました。この二年間は、公民館図書室時代にやり残した積年の課題を解消しながら、新たな体制をゼロから立ち上げる、非常に厳しい局面でした。並々ならぬ困難が伴い、皆で多くの苦労を重ねましたが、その分大きな成長・進歩を遂げることが出来たと思います。

私たちは大塚館長のもと、以下の三つの柱を軸に取り組みを進めてきました。

一、「待ちの姿勢」から脱却し、積極的に地域や外部組織と「つながり」、「出向いて」図書館サービスを提供する。

移動図書館車「めばえ号」を活用し、色々な場所に「出向いて」図書館サービスを提供しています。（写真③）移動図書館車「めばえ号」は、定期巡回だけでなく、依頼を受けて人の集まる場所を個別に訪問するスタイルをとっています。子育て支援センター、町内こども園、学校、学童保育、高齢者施設、高齢者サロン、地域のお祭り、マルシェ、スポーツイベント等あらゆる場所に、それぞれのテーマに沿った本の紹介やおはなし会など、内容を都度考え、場所や人との「つながり」を意識して「出向いて」います。

▲写真③

二、すべての世代に読書体験を届ける。

乳児健診から学校、高齢者施設まで、各年代層の集まる場所に出向くことにより、全世代に働きかける機会を確保しています。乳児前期健診では、問診表送付時に図書館の利用カード申込書を同封し、健診会場でカードを作成してお渡ししています。同時に、ブックスタート事業では、図書館の本を室内に展示し、絵本の読み聞かせに併せて、図書館の利用案内や乳児向けイベントを案内しています。幼児健診でも本の紹介チラシなど読書に誘う資料を配布しており、特に最優先課題として取り組んだ子育て世代の図書館の認知度は格段にあがりました。

また、高齢者施設や高齢者サロンでは、紙芝居や脳トレ手遊びが好評で、高齢者施設からの依頼も徐々に増えています。（写真④）

三、これからの図書館の役割である、「学びサポート」を充実し、学校連携を推進する。

町独自の調べる学習コンクール「しらべてガッテン！」や、夏休み自習・自主学習支援教室「まなび座」のほか、日頃から自習希望者には学習場所を確保しており、少しずつ自習利用が増えてきました。今年度からは、中学校の生徒会からの依頼で、図書館で自習する取り組みが始まり、多い時で六十名を超える中学生が中央館に来館し、勉強しています。職員は、自習関連本を提供したり、息抜きになる本を紹介することもあります。ときには励ましたり、そばで見守って学習のヒントを出すなど、地域の子どもを見守る大人として子どもたちと関わっています。これらの取り組みを通して、学校の先生方と接する機会も増え、定期的な本の貸出や、図書館への連携依頼も増えました。

このほか、職員の資質向上にも力を入れてきました。公民館図書室の業務は「本の管理」でしかなかったため、訪問やイベントなどの新しい取り組みに対する不安を感じる職員が多かったのですが、グループディスカッションをして京丹波町の図書館の在り方を議論したり、レファレンス研修として、外部講師を呼んで、郷土の歴史に触れたりすることで、少しずつ職員の意識が変化していったように思います。

▶写真④

館長からは、いつも「回り続けるコマになれ」と言われます。常に住民にとって最善かどうかを考え続けること、信念をもって主体的に取り組むこと、専門職として自己研鑽を怠らないこと、ゆっくりでも良いから止まらないこと。館長のこの言葉は職員にしっかりと浸透しています。京丹波町図書館には拠点が四カ所ありますが、職員皆ですべての拠点を運営する体制をとっています。毎日違うメンバーと勤務し、様々なことについて相談し、議論し、図書館は楽しい場所であるべきだという信念のもと、日々の業務を真剣に楽しんでいます。

図書館開館の出発点である、「京丹波町どこでも図書館構想」のスタート前、令和二年当時の人口一人当たり年間貸出冊数はわずか一・二冊でしたが、貸出は右肩上がりに増加し、令和六年度は四・二冊になりました。現在も少しずつ増え続けています。

貸出や依頼の増加に伴い、新たな課題も出てきています。移動図書館車が絶え間なく動いているので、蔵書管理が複雑になったり、取り寄せリクエストの増加で管理が難しくなったり、団体貸出が増えてコンテナが館内に所狭しと並び、運搬負荷も大きくなりました。しかしながら、業務の増加は取り組みへの評価でもあります。大変ですが喜びややり甲斐を感じます。

今年の新たな挑戦は、「いのち輝

け！」と題し、戦後八十年を機に「いのち」を考える一大イベントの開催です。職員を含め、図書館の成長・進歩の成果として実現したものです。今後も京丹波町図書館は、多くの皆さんと、本を軸として様々な「つながり」をつくり、共に成長し、発展していきたいと思います。

歴彩館春季企画展「EXPO1851→2025」を開催して

京都府立京都学・歴彩館　藤原　直幸

展覧会を企画したきっかけ

今回の展覧会を企画するきっかけはその前年にあった京都府ミュージアムフォーラム合同展覧会「スポットライト　今、ミュージアムが光を当てたい逸品展」でした。歴彩館からは図書部門で管理している現物資料を展示しました。

現物資料とは、選挙ポスターや版木、寄贈者の使用していた日用品など、書籍ではない資料を指します。それらはオンラインで目録が公開されていないこともあり、ほとんど利用されていませんでした。

▲写真⑤

当館では、初代京都文化博物館長であり、万国博覧会を研究していた吉田光邦氏のご遺族から旧蔵資料の寄贈を受け、「吉田文庫」として活用しています。令和七年度の展覧会を企画する際に、吉田文庫の現物資料の中に万国博覧会のポスター（写真⑤）や一八五〇年ロンドン万博以降の出品物を紹介した洋書などがあることを知り、ぜひ紹介したいと考えました。

また、二〇二三年度には一九七〇年の日本万国博覧会（大阪万博）の会場計画を担当した西山夘三氏の蔵書（西山文庫）もご寄贈いただいており、これらの資料を使って大阪・関西万博を盛り上げる展覧会を開催することになりました。

展示資料の選定

展覧会の開催を決めた後、展示資料の選定は難航しました。というのも吉田文庫にある万博関連の資料はかなり多く、万博の歴史を網羅的に紹介しようとすると、展示スペースに到底収まりきらない量になります。また、当館は京都に関する資料を主に集めていますので、最近の万博に関する資料はほとんど所蔵していませんでした。

そこで、期間を限定し、「世界の万博」として、一九〇〇年以前の万博について紹介し、「一九七〇年大阪万博」として西山文庫の資料を紹介することにしました。また「近代日本の博覧会」として、日本で初めて「博覧会」の名称が使用された京都博覧会や、関西で開催された第四回、第五回内国博覧会など京都に関係した資料を展示する三部構成としました。（写真⑥）

◀写真⑥

展示内容については各博覧会の概要を紹介するのではなく、日本が世界からどう見られていたか、日本は世界をどのように見ていたかという視点で紹介することにしました。

「一九七〇年大阪万博」については、西山文庫から会場計画や、万博を紹介するテレビ番組の企画書、日本万国博覧会協会からの感謝状など当館にしかない資料を主に展示することにしました。

これにより、当館でしかできない展覧会になったのではないかと思います。

展覧会の広報について

報道機関への発表は実施しませんでしたが、展覧会が始まると新聞社やラジオからの取材依頼がいくつかあり、万国博覧会に関する世間の注目の高さを実感することになりました。

最終的にテレビ一件、新聞社三件、ラジオ二件に展覧会を紹介してもらいました。いずれの取材も実際の展示資料を見た上で記事や放送原稿を作成しており、丁寧に時間をかけた記事にしていただきました。特に京都大学新聞は一面の四分の一を占める記事を掲載してくださいました。

また、ＫＢＳ京都のラジオでは私が出演し、歴彩館から展示の紹介をするという貴重な体験をさせていただきました。このラジオ放送を聞いて来館された方もいて、マスコミの広報の力を実感しました。

取材の中で気づいたのが、紹介したい資料として多くのマスコミから希望されたのが京都の岡崎地域で開催された第四回内国博覧会の資料であったことです。担当者としては別の貴重な資料を紹介するだろうと考えていたのですが、地域の資料を展示するのが大事だと気付かされました。

入場者の反応

入場者のアンケートでの反応を見ると、「万博の歴史がわかって良かった」、「見たことのない資料が多数あり見応えがあった」など、好意的な感想を多くいただきました。企画当初に考えていた、知られていない資料を知ってもらうという思いは達成できたかと思います。

また、京都府外からの入場者が三割近くにのぼり、他府県の方にも関心の高い展示ができていた証拠かと考えて

います。今回の展覧会は国宝や重要文化財のない図書を中心とした展覧会でしたが、マスコミや入場者の反応も良く有意義な展覧会でした。

議会事務局職員へのレファレンス研修実施報告

京都府立図書館　野原隆之介

令和七年五月十五日に、京都府議会事務局職員に向けて「資料の探し方図書館のレファレンスから」と題したレファレンス研修を府庁にて実施しました。

研修のきっかけは、議会改革の一環として議会事務局機能の強化に関する検討が行われたことにあります。現在、議員のサポートを担う議会事務局には必要な人員は確保されていますが、二十代の若手職員が多く配置されています。今後も議員へのサポート体制の充実を図るため、調査研究に関する研修が求められていました。そこで、従来から議会事務局内の議会図書館と連携していた当館が職員を派遣し、研修を実施することになりました。

当日の研修の主な内容は、本の探し方とインターネット情報源の紹介です。本の探し方では、当館ウェブOPACの検索結果から、自分の求める内容の本がどれに該当するのかを判断する材料として、書誌情報を紹介しました。たとえば、書誌情報のうち出版年は、自分の求める情報が最新である必要があるのか、あるいは古くても問題ないのかを考える際に重要となります。また、大きさも重要です。『図書館に訊け！』（井上真琴／著 筑摩書房 二〇〇四）では、「図書の形態（頁数と大きさ）」において書誌学に触れつつ、本の縦の大きさと頁数から、その本が何文字で四〇〇字詰め原稿用紙何枚分に相当するかを判断しています。この判断は私には難しいのですが、単純に大きさや頁数から、分厚い専門書なのか、一般的な本なのかをある程度判断する材料になります。

そして、図書館司書にとってはおなじみの「件名」と「分類」についても紹介しました。件名については、カスハラ関連の本を図書館のルールで「苦情処理」という言葉に統一し、カスハラ分野の本を探しやすくするという、少し苦しい説明をしました。なお、研修後に『ゼロからの読書教室』（読書猿／著 NHK出版 二〇二五）において、件名と分類がわかりやすく紹介されていることを知り、この本を参考に説明すればよかったと少し後悔しました。

インターネット情報源については、国立国会図書館のサイトを中心に紹介しました。国立国会図書館サーチ、国立国会図書館デジタルコレクション、リサーチ・ナビ、レファレンス協同データベースなど、普段図書館司書がお世話になっている情報源を、実際に議会事務局や当館が受けたレファレンス事例とともに紹介しました。たとえば、議会事務局では「BCPについて知りたい」という問い合わせがありました。これをレファレンス協同データベースでそのまま「BCP」と入力して検索すると、さまざまな図書館のBCPに関するレファレンス回答事例が検索・閲覧できることを紹介しました。

このように、研修では図書館司書が普段使用しているものをただ紹介したにすぎません。しかし、レファレンス協同データベースを初めて知ったという声や、雑誌記事検索があることに驚いたという声がありました。今回のような当館と議会事務局との連携は初めてであり、内容も図書館司書にとっては当たり前すぎるものであったため、正直なところ大変不安でしたが、意外にも図書館の知識は行政職員にも役立つかもしれないという手ごたえを得ることができました。

府内の他の読書施設・図書館では、行政機関と連携して先進的な取り組みをされているかもしれません。その際は、ぜひ当館まで情報をお寄せいただけますと幸いです。また、議会事務局・議会図書館の支援は、行政の政策立案や行政サービスの発展につながり、最終的には地域住民に利する可能性があります。当館では、引き続き普段の業務を遂行しながら、業務から得られた図書館司書としての技術や知識を本庁や各館に共有していきたいと考えています。

令和七年度 京図連協研修予定

北部　令和七年十二月九日（火）
テーマ「統計分析やSNSによる利用率UP」
場　所　宮津市福祉・教育総合プラザ
講　師　佐藤　翔 氏
（同志社大学免許資格課程センター教授）

中部　令和八年二月二十日（金）
テーマ「図書館員に対するハラスメント行為への対応等について」
場　所　京都府立図書館
講　師　千　錫烈 氏
（関東学院大学）

南部　令和八年二月（予定）
テーマ「ChatGPTの活用」
場　所　京田辺市立中央図書館
講　師　原田　隆史 氏
（同志社大学）

第三十五回京都図書館大会
テーマ「地域振興と図書館（仮題）」
日　程　令和七年十一月十日（月）
場　所　京都府立京都学・歴彩館

＝会報はホームページに掲載＝
京都府図書館等連絡協議会のホームページに過去の会報も掲載しています。御利用ください。